言葉よ、とどけ。

県内の小中学生の作文発表の場である「社会を明るくする運動長野県作文コンテスト」。犯罪や非行について日ごろ考えていることや身近に体験したことを言葉にし、社会に届けています。本年度のコンテストで、中学校の部・最優秀賞を受賞した宮澤玖弥（くみ）さんの作文を紹介します。

社会を明るくする運動
長野県作文コンテスト
（中学校の部・最優秀作）

人に優しい世の中を目指して

◎堀金中学校三年　宮澤玖弥（くみ）

今の世の中を見ると、不況による働き世代の自殺報道、医療・福祉に不安を抱えたお年寄り達の悲痛な叫び、将来に明るい希望を見い出せない若い人達の声と、どの世代も不安だらけです。

私の家族は、普通の家庭では、経験することのない不安な日々を何年も過ごしてきました。

私が四才の時、妹が生まれました。うれしくて、うれしくて家族で大喜びしたのを覚えています。しかし、健康だったのは、たった一カ月で重度の障害を一生背負う病気となってしまいました。医師から目は見えなくなり、食べる事も立ち上がることもできないと言われ両親は、涙がかれるまで泣いて絶望のどん底だったのを覚えています。

私の両親は、寝る暇もなく、昼夜にわたり看護をしてました。今思えば、妹も、話せなかったけど辛かっただろうし、両親も、その時希望を見い出せず苦しんだと思います。それでも月日が経過し、毎日、妹の必死に生きようとする姿を見るにつれ、家族に明るさと、前向きな気持ちが芽生えました。そして、病院で知り合った障害者をもった家族の人達に出会い、人を思う優しい一言で「頑張るぞ。」という気持ちになれたと両親は、言っていました。私は、前向きな両親をみて、少しでも妹と両親の力になろうと思い、自分ができることを精いっぱいしました。

ある日、母から三人目の子供が生まれることを聞かされました。

「姉弟で力を合わせてね。」

と言われ、驚きました。明日は、どうなるか分からない私の家族の状況を考えれば、生まれてくる弟と私が頑張らなくてはいけないと思いました。しかし、これからどうなるか分からない事を考えると、とても不安でした。

その頃、私は、将来福祉関係に進み、一人でも多く妹と同じ障害を持った子供達の為になれないかと思い始めました。しかし、妹は六才という短い生涯を終えてしまい、それと同時に長年介護にあたっていた母にまで、重い病気が発症してしまいました。私は、母の泣く姿を見て、どうすることもできずに、ただ見ていることしかできない自分がとても悔しくて、悔しくて涙がとまりませんでした。化学治療法で髪は抜け、吐き気で寝込むこともありました。その中での幼い弟の育児はとてもたいへんでした。しかし、母は、

「頑張るから、心配しないでね。大丈夫だから。」

と、辛さを表に出しませんでした。私達に心配をかけないようにする母をみて、私は、すごく胸がいたみました。母は、自分の友達にも病気のことが分からないように、明るく振る舞って心配をかけないようにしていました。そんな姿を見て、私だったらこんなふうに我慢することはできるのかなと思いました。

ある日、母は私に、手術で体は、ボロボロの中、「玖弥は、人が経験できないことをいっぱい見てるんだから、人に優しくできるよね。」と言われました。私は、母や妹、病院で出合った障害者の子供達を見てきたし、その母の一言で福祉関係に進みたいという気持ちが深まりました。たいへんだろうなと思うけれど人の命の大切さは、亡くなってしまった子や妹をずっと見てきて、感じてきたので、どういう形でも人の役に立ちたいなと思いました。

今年の一月、母が亡くなってしまいました。大好きだった母がいなくなってしまったというのは、とても悲しく、苦しい現実でしたが、私は、母からたくさんの事を学びました。人の命の尊さ、立ち直る力などとても大切なことを学びました。一緒にいられた時間は少ないけれど、母との時間は、とても大きなものです。私は、一生母の言った言葉を忘れずに母や妹の分まで頑張っていこうと思いました。

母は、ニュースを見て自殺・殺人といったのを見ると、

「今は、こんなニュースばっかりで、安心して暮らせる日がなかなか来ないね。」

と言っていました。私は、安心して暮らすには、一人一人が命の大切さを知り、人を思いやることを知ることだと思います。そうすれば、自殺・殺人という言葉は自然に消えると思います。将来が人に優しい世の中になり、安心して暮らすことができるように、私は、友達・家族を大切にし、一日一日を大切に生きていきたいです。

家族で長島温泉に出掛けた時に撮った写真。当時、玖弥さん５歳（写真左下）。アルバムに残る大切な一枚。

中学３年生の玖弥さん。受験を控えた忙しい中、取材に応じてくれました。

必死に生きようとする妹の姿。
そして、母の言葉。
私は、たくさんの事を学びました。